◇ 8月の天文暦 ◇

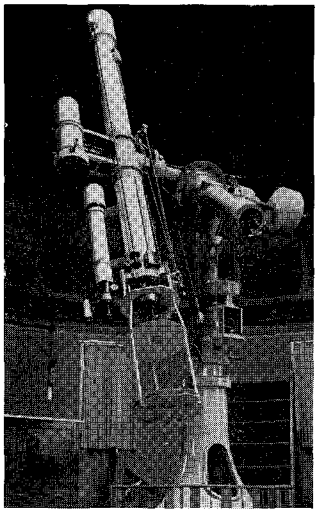
日	時	記　　事
2	15	**朔**
	21	火星　合
4	7	月　最遠
8	8	立秋（太陽黄経 135°）
10	18	**上　弦**
17	0	水星　東方最大離角
	12	**望**
	16	月　最近
23	23	処暑（太陽黄経 150°）
24	6	**下　弦**
30	4	水星　留
31	10	月　最遠

国立科学博物館の 20 cm 赤道儀

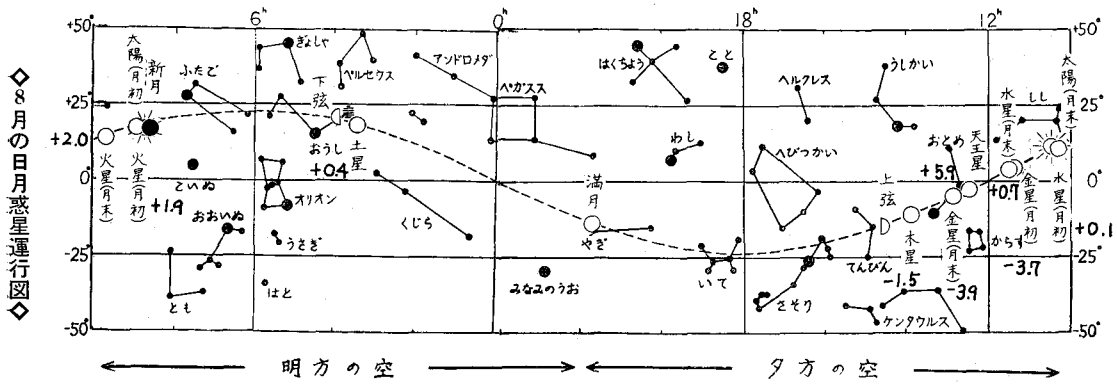
口径 20 cm，セミアポクロマート，F18，スマートな白い筒でおなじみの私が，ここ上野公園の国立科学博物館屋上にお目見えしたのは昭和6年，本館が新築されたときである．

その頃はまだ天体望遠鏡といえば，みんな目を丸くするほど珍らしいものだったらしい．生みの親は日本光学，国産第1号として誕生した本格的な赤道儀．何でも現在，三鷹の東京天文台にあるツァイスの 20 cm 赤道儀がお手本だそうな．

その頃，上野の空は今では想像もできないほど素晴らしかった．付属の 10.5 cm，トリプレット，F 4.8 の星野カメラもその性能を充分に発揮できた．ここの初代主任であった鈴木敬信氏は写真室の職員と一緒にこの星野カメラで撮影した乾板で幾つかの変光星を発見した．また毎週土曜日の夜は天体観望を公開して当時の天文ファンの星へのあこがれをかきたてたものだ．その頃の夜間公開の様子を一寸御紹介すると，「当日（土）本館観覧者中の希望者に人数を限って観覧券を渡す」とあり，おまけに「1人約3分，1夜に1～2天体を見せる」とある



から何だか申訳なかった．この夜間公開に必ずといってよい位，顔を見せた一少年が現職員の村山定男氏であったこともつけ加えておこう．

その後，このドームで藤田良雄，古畑正秋両先生も観覧者を相手に星を説明されたことがあるし，戦争中には清水一郎氏，冨田弘一郎氏といった現在東京天文台で活躍されている方々のお世話になったこともある私である．戦後は太陽黒点の連続観測，火星や木星面の観測にいそがしく働き始めたし，空の美しい間は星野写真も続けられた．しかし残念なことに，その頃は“14等星が見えるぞ”と自慢していた私も毎夜のように数を増していく地上の星々には手のほどこしようがなく，今では太陽，月，それと惑星くらいにしか真価を発揮できないでいる．それでも相変らず土曜日の夜ともなれば日暮を待ちかねて押しかけるアマチュア天文家の数はふえる一方．昔は1人，2人といったこともあった真冬の夜などでも，50人，60人と押しかけてくる．

日食や月食の特別公開，火星の接近の時の観望会など延々と行列が続いたことも数えきれない．失なわれていく美しい星空に反比例して天文ブームは盛上り，あちこちに誕生する後輩たちの口径も数も急上昇のカーブをたどっている．“小さいなあ!”と私を見上げる人もぽつぽつ出はじめた近頃である．しかし5年ほど前に一度ドック入りし，美しく化粧し直して若返った私は，旧式とはいえまだまだ健在．これからもますます多くの天文ファンを育てていきたいと願っている．　（小山ひさ子）